

## 平成17年度事業及び収支報告書

当振興会は事業開始から38年目、財団設立から33年目の年度を終了した。

### 1. 概要報告

音楽鑑賞教育振興会（音鑑）のこの1年間は、平成16年度に開始した受益者負担型の財団運営への方向転換を、更に具体的な成果に繋げる経営改善に取り組んだ年度であった。つまり財団の収入の範囲での「助成事業」の実施と、将来の収入源となる「研究事業」を目標とし、各々の事業を相互に結びつけることで事業成果を効果的に生むことに力を入れた。

この目標の実現のため17年度中間を過ぎた時点で、事務局内に設けた経営改善会議を早朝会議の形で進め、年度の後半にはそこから得られた事業運営の方策を理事長に答申した。その結果今後の経営方向を見定めての事業運営を行なっている。

しかし、継続事業の殆どが、本来事業の採算性を求めて起こしたものではなく、収益の上がる構造を持っていない。また営利目的ではない財団の看板があるが故に、急な舵取りは、これまで30年間に渡る受益者であった教員側の戸惑いに繋がり、さらに言えば音鑑離れを招きかねない懸念も感じられる。

その様な現状の問題点から、音鑑の提供する情報に投資してもらえる金額で費用を的確に回収できる見通しは未だに立っておらず、抜本的な事業改革の必要性を確認した年であった。

収支改善面で努力できることは、まず経費節減であり不急の案件の一時凍結である。例えば研究員への謝礼を、従来の会合が追加される度に支払う謝礼を止め、基本は仕事の成果に対しお支払いする形にするなど、これまで大切にしてきた研究員の処遇まで見直した。

また論文作文募集事業においても、サントリー小ホールと全日空ホテルでの会場組み合わせを支援企業の会議室に移設。華やかさは失せたものの、職員の手で準備された結果、手作り感のある表彰式と参加者に評される形に切り替わった。

こうした努力の積みかさねにより、主な財源である株式の配当の減少があったが、平成17年度の欠損額は46百万円改善することができた。

#### 1 - 1 期中重点施策についての報告

17年度重点施策の活動の要点は次のとおりである。

##### 1. 研究事業の成果を見通した活動

成果を見通すということは、第一に発信する情報が客観的な価値を得るものであり、次に相手に伝わりやすい形で表わすこと、そして時期を過たないことにあると考え、その実現のため研究活動に目標管理の考えを置き、各研究員とは一定の成果を期待する業務委託契約を結んでこれに当たった。

こうして体制は整ったものの、現役教員のゆとりが一層なくなっている模様で、委員会内部の周知徹底に手間取り、研究成果を当初の期待値に到達させ具体的に発信できるまでには至らなかった。しかしながら研究調査や「新・冬の勉強会」など、音鑑の仕組んだ大きなプロジェクトは効を奏し、関係者に新しい音鑑の姿を示し、今後にご期待をいただけるところとなった。

研究事業の成果は最終的には充実した指導案を実現するための書籍・教材を想定している。

## 2．実践奨励の事例募集の充実

この課題は教員の日常の工夫を掘り起こす目的で応募の急増を図ったが、音鑑が評価する以上は、一定度の見識に耐えるものでなくてはならず、また、借り物の事例ではない工夫を実証したいがため、実践工夫の手軽な募集とは言えない要項になりがちであり、また作文募集の業務の陰になり、実践奨励の積極的な応募活動はできていなかった。財団は実践奨励募集の重要性を確認しているので、他の事業との組み合わせなどで応募を促進したい。

## 3．作文募集の教育的位置づけの整備

音楽を作文で表わすこと自体の評価の困難さは付きまとうが、「学校と音楽」という枠を設けたことと、音楽科唯一の行事として文部科学省主催の「学ピンピック」に認定されたことがあり、その位置づけが明確になった。審査についてもその観点で実施された。

また昨今話題となっている子どもの読解力の低下や、感じたことを表現する力を引き出す教育上のイベントとしても時代に沿うものとなったといえよう。

## 4．月刊誌の購読層拡大

月刊誌「音楽鑑賞教育」は、論文を載せられる雑誌なので内容優先といった評価があるものの、購読者が伸びないための経費削減が続き、雑誌の装丁はあまりにも古い感があった。編集に外部からの意見を求めた結果、見やすく読みやすくという課題が実現されていなかったことと、各号の主眼がよく見えないことを指摘され、年度後半に至って専任担当を廃し職員全員の手で雑誌を産む体制にした。

これにより本来求めていた月刊誌とホームページの関連、あるいは研究委員会の動向などが明瞭に反映されるようになった。購読料は予算に満たない水準に終始したが、年度末にいたり拡販の戦略を得たことから、これを実施、読者から今後への期待の声が届いている。

この編集の改善は、これまで執筆者に気遣い、入稿遅れがあっても人海戦術で対応した編集作業の効率化ももたらした。装丁を替えても費用の掛からない副次的効果ももたらした。

## 5．ホームページ（インターネット）の活用

ホームページの形ができ、更なる利用を考えての予算であったが、それはブログ(日記スタイルの投稿)をホームページに組み込み、屈託のない情報でホームページに利用者を招き入れるような費用の掛からない範囲での活用に終わった。メールマガジンについては月刊誌自体の取り組みを強化したため、手が回らなかった。

活用の主眼としてはこのほか松本記念音楽迎賓館への誘導を意識して、Y A H O Oでのキーワード検索で松本記念音楽迎賓館を上位で紹介できる仕組みを導入した。

## 6．松本記念音楽迎賓館の収益体制追求

当面記念館を開館する費用だけでも回収することを目標に、1．土日の開館 2．邦楽用のお稽古部屋の新設などを行なった。この際、財団創設者記念の部屋とメモリアルの位置づけを明確にし、貸し館業と並存させ、創設者の生誕100年に当たる年を飾った。

しかし、オペレーションコストを賄えない主催コンサートなどを打ち切ったため、利用料自体は減少した。運営面では事業計画の立案から肌理の細かいフォローが必要だったが、こうした業務の経験不足から、プライダル事業者と契約を交わし収益の柱に育てることにした。

## 1 - 2 予算対決算の概況

決算資料 ページ参照

収支動向の実態を示す当期収入合計Aと当期支出合計Dの予算実績差異を比較すると、決算の値は収入が約8.6百万円増加して13.6百万円(対前年 1.7百万円)、支出は約37.6百万円減少して17.1百万円(対前年 3.8百万円)となった。収支差で見ると 8.1百万円の予算が決算では 3.5百万円と、収支面では年間4.6百万円の改善となった。

## 2. 個別事業の報告

### 2 - 1【研究事業】

#### 研究事業委員会

研究内容全体の確認と連携を図る委員会として研究事業委員会を構成した。また、7月の「第29回夏のセミナー」、12月の「第3回新・冬の勉強会」の企画、構成を行なった。

研究事業委員会委員の委嘱

この事業の推進者として松本理事長から下記4名が委嘱された。

小原光一(委員長) 財団常務理事

川池 聡 財団評議員、研究事業主管

渡邊學而 財団評議員、研究事業主管

金本正武 財団評議員、千葉大学教授 (平成18年3月31日現在 敬称略)

#### ・第29回「夏のセミナー」の企画

「子どもを引き付ける授業とは」、またその上で、確実に力を身に付けられる「ねらい」を絞った教材選択と指導法を普及すべく、内容を構成した。

このセミナーの特徴は指導助言者を交えた小集団研修で、実際に音楽を聴いて教材研究、指導の流れをシミュレーションして、合宿による徹底した実践的な体験研修をすることにある。現職教員の指導力向上を目指すものとして実施した。

研修の日程等は 助成事業の 項、主催講習会 の項に記載。

#### ・「新・冬の勉強会」の企画

音鑑の一年間の研究成果を提案する場及び音楽科教育の今日的課題を一括して学べる勉強会として、昨年度に引き続いて企画した。一度に全国の多くの教員に情報提供のできる場として、200～300人規模の受講生を集められる会場や内容を企画構成した。

その企画書をもって文部科学省の後援事業の認定を受けている。

研修の日程等は「助成事業の 項、主催講習会」の項に記載。

#### 研究開発部会

「義務教育9年間に音楽科が果たすべき指導内容とその効果の見取り方に関する研究」としてスタートした開発部会は、平成16年度に、学習指導要領を分析しその趣旨を読み取

ることによって、音楽科における学力としての学習内容(=「学習内容の要素」)を明らかにし、学校教育の中での音楽科が果たす役割(「確かな学力」、「生きる力」にどのように関連づくか)を明確にした。そして今年平成17年度は、「学習内容の要素」を活用した学年ごとの1年間の学習プラン(=「年間指導計画」)の作成方法を提案し、その具体例として9年間の「年間指導計画」を示した。

なお、「第3回新・冬の勉強会」でこれまでのまとめを提案した。

### 指導普及部会

授業を実践する指導法に魅力がなければ児童・生徒に確実に力を身につけさせることができないという趣旨で、子どもたちにとって、客観的で「音楽を理解できる楽しさ」を発見できる指導法の実践研究に努めた。また、その指導法を音鑑から全国に伝播できる機会の核とするため、「夏のセミナー」を改めて企画し実施した。

さらに「新・冬の勉強会」では、公開指導として「ねらい-教材-指導法」の一連の事例提案を行なった。

### 調査部会

音鑑の研究内容や音鑑が行なう事業の方向決定の裏付けとすることを目的に、第1回調査を行なった。調査内容は、「学校における鑑賞指導に関するアンケート」とした。

1. 音楽室等の設備、環境について
2. 教材について
3. 指導計画に関わる内容について
4. 指導と評価について
5. 授業以外の鑑賞指導の現状について

この5項目に「音鑑への要望」を合わせ小中学校の音楽に携わる教員に行った。

実施方法は、各教育委員会、全日本音楽教育研究会各都道府県支部、月刊「ONKAN」誌購読者に依頼し、全国から1283名の回答を得られた。なお、この調査結果は、「第1回調査報告書」としてまとめ出版する。

### 資料室

音鑑が保有する音源や研究資料を、現職教員が教材研究や指導案検討の材料として利用できるように、平日10:00~17:30の間、予約制で利用希望者を受け入れている。

#### ア 利用状況 月別利用者数および利用状況 ( )内は重複を含む回答数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計	
8	27	25	47	102	21	12	10	8	15	3	4	283	
利用者勤務先(279)			%		利用形態(280)			%		利用目的(323)			%
小学校			82.1		来室			95.0		授業で活用			65.6
中学校			11.5		依頼			5.0		指導案作成			13.3
高校			2.2							学校行事で活用			10.8
大学			2.1							教科書・書籍			5.3
他			2.1							論文研究			2.8

利用者数は前年370名に対し、76.5%の計283名。

イ 新規購入資料

DVD、CD、書籍など研究委員会が必要とするもの、および月刊「ONKAN」に掲載されたもの、教科書改訂に伴う教科書会社教材を中心に購入した。

ウ 資料検索のためのデータ化

資料室保有の映像・音源資料をホームページで検索できるようデータ化を行っており、これまで購入された資料のインプットを終えた。現在新規購入のほか、教材開発に活用される可能性を考慮し、これまでの財団出版指導書掲載の指導事例、および月刊誌インデックスのデータ化をすすめている。

## 2 - 2【助成事業】

### 選考委員の委嘱

助成事業実施にあたる選考委員は、平成 16 年度に任期 2 年間で委嘱しており、継続してお引き受けいただいた。

小原 光一 財団常務理事（選考委員長）

千田 捷熙 全国高等学校長協会 元会長、筑波大学附属桐が丘養護学校長

西村 佐二 全国連合小学校長会 元会長、聖徳大学講師

藤崎 武利 全日本中学校長会 前会長、東京都港区立三田中学校長

吉田 時雄 聖徳大学 元講師

渡邊 學而 音楽評論家、財団評議員

（職名は平成 18 年 3 月 31 日現在、敬称略）

### 第 38 回 論文作文募集

- ・学校教育を振興する財団の目的を明瞭に打ち出すため、児童・生徒を対象とした作文募集は部門別テーマを廃し、「学校と音楽」の全体テーマに絞って募集、実施した。
- ・「実践奨励の部」は、応募数を増加させるねらいをもって、月刊誌誌上に応募例として昨年度入選実践を毎号掲載したが、効果なく今年度は応募数が下落した。
- ・予算執行は、月刊誌別冊として発行してきた入選作文特集号を定例号に合冊、表彰式・昼食会場の変更、作文の部努力賞入選数を固定値から相当数に変更、募集案内DMの軽量化による送料の軽減などにより、対予算 90%に抑えた。

ア 募集テーマ

- ・研究助成の部 「豊かな感性の育成をめざす音楽教育の研究」
- ・実践奨励の部 「音楽鑑賞に関わる指導の実践」
- ・作文の部 「学校と音楽」

イ 募集方法

全国の小・中・高校および、各市町村教育委員会 約 42,000 件に募集パンフレットを送付。その他月刊「ONKAN」誌、ホームページ、および広告代理店を通じリビング誌・各新聞等に記事を掲載。

ウ 募集期間

平成 17 年 6 月 1 日～9 月 30 日

エ 応募状況

	第 38 回	送付数	第 37 回	送付数	第 36 回	第 35 回
研究助成の部	6	6	4	4	1	6
実践奨励の部	4	4	11	11	(論文) 5	(論文) 4
小学生の部	4,094	952	5,059	1,383	5,851	4,016
中学生の部	7,886	986	5,863	704	6,534	7,385
高校生の部	1,087	119	1,636	191	1,321	1,956
一般の部	0	0	0	0	145	154
作文合計	13,067	2,057	12,558	2,278	13,851	13,511
(応募校数)	470	-	488	-	721	646

オ 入選数内訳 (入選者名は月刊「ONKAN」2006.2月号に掲載済)

a 研究助成および実践奨励の部

部 門	入選数		応募数
研究助成の部	1 件	研究助成金 100 万円	6
実践奨励の部	2 件	DVDレコーダー	4

実践奨励の部は今後の研究発展のため、応募者全員にDVDレコーダーを贈呈した。

b 作文の部

作文の部	最優秀賞	優秀賞	佳作	努力賞	入選数計	パイオニア賞
小学生の部	1	2	6	8	17	15
中学生の部	1	2	6	9	18	10
高校生の部	1	2	3	4	10	6
計	3	6	15	21	45	31
副 賞	DVD-R または MD/DVD コンボ等から選択			ヘッドホン 選択		PDP、 DVD-R 等

努力賞は従来、小・中学校 30、高校 6 の設定であったが、今年度から佳作次点をその対象にし、相当数入選とした。

カ 審査

選考委員会が委嘱する審査委員が、10月5日第1回審査委員会から全ての送付作文に目を通し、11月末までの各部門別審査委員会において、審査基準に基づき入選候補作品を選出。最終選考委員会で、入選者を決定した。その結果は12月8日、ホームページおよび郵送で応募校・応募者に通知した。

審査顧問は全日本音楽教育研究会会長の福井 直敬様(平成17年12月1日現在)に委託した。

キ 審査委員 計 27 名(対前年 3 名減:委員名は月刊「ONKAN」2006.2月号に掲載済)

a 研究助成の部 3 名

b 実践奨励の部 5 名

c 作文の部 19 名(小学生の部 8 名・中学生の部 7 名・高校生の部 4 名)

ク 表彰式

入選者表彰式は、これまでのサントリーホールを離れ、平成18年1月22日に財団事務局が所在するパイオニア株式会社目黒本社ビルで行なった。今年度は会場規模の都合もあり佳作以上の入選者を表彰式に案内し、実施した。

## ケ 協 賛

- ・ パイオニア株式会社

## コ 後 援

- ・ 文部科学省
- ・ 全国都道府県教育長協議会
- ・ 全日本音楽教育研究会
- ・ 全国音楽科指導主事協会
- ・ 全国連合小学校長会
- ・ 全日本中学校長会
- ・ 全国高等学校長協会

## 海外音楽鑑賞教育視察団の派遣

音鑑の財源の都合で休止しているが、音楽鑑賞教育振興会の名で推薦するにふさわしい海外音楽ツアー情報を求めたが、大手業者から適合するツアーの紹介はなかった。

## 賛助活動

例年通り広告や協賛は、全日本および東京都の小・中・高等学校音楽教育研究会名簿、日本音楽教育学会、日本学校音楽教育実践学会、各ブロックで開催される研究大会プログラムに掲載した。

研究団体への賛助は他に全日本音楽教育研究会、日本音楽療法学会などがあり、財団法人関信越音楽協会、財団法人日本オペラ振興会など演奏団体に対しても行なった。

## 鑑賞教室

主におんかん友の会の会員に、賛助先のチケット斡旋を行なった。また、日本の音楽の鑑賞機会を、ホームページ等を使い教員に紹介した。

H17年度斡旋コンサート

許可 / シルクロードコンサート (二胡)

新作オペラ「愛の白夜」

ベートーベン / 交響曲第9番合唱つき (サントリーホール・東京芸術劇場の2公演)

論文作文入選者表彰式の後開催された、ジュニア・フィルハーモニック・オーケストラ定期演奏会に、例年通り入選者および付添い者、審査委員、財団関係者など対象に希望者を招待した。その費用は鑑賞教室として捉えている。

ジュニア・フィルハーモニック・オーケストラ演奏会

日 時 平成 18 年 1 月 22 日 (日) 午後 2 時

会 場 サントリーホール

出 演 指揮：野平一郎 / 金洪才

演奏：ジュニア・フィルハーモニック・オーケストラ

曲 目 ドビュッシー / 牧神の午後への前奏曲

ストラビンスキー / 火の鳥 他

## 主催講習会

### 第 29 回「夏のセミナー」

研究事業委員会の企画を受け、下記の通り開催した。

今年度は参加申込み者数が、小学校教員 12 名、中学校教員 5 名、教育委員会指導主事 1 名になったため、小学校 2 グループ、中学校 1 グループ、計 18 名で実施した。また、昨年度に続いて、各地域で夏ゼミ方式の宿泊研修を実施しているグループから「招待受講者」を募り、別枠の研修プログラムを実施した。第 2 回の今回は、和歌山の音楽教育研究会から 1 名、広島之音研から 1 名、熊本の音研から 1 名、計 3 名を招待受講者とした。実施内容は下記の通り。

研修テーマ「音楽を愛好する心情を育てる鑑賞の指導」

ア 会場 パイオニア研修センター（二子玉川）

イ 日程

第 1 日 7 月 29 日（金） 開講式、オリエンテーション

12：55 オリエンテーション 開講式

13：00 開講式 開会の講話

13：30 講義「音楽を愛好する心情を育てる鑑賞の指導 鑑賞指導の基本的な考え方」および「研修内容と進め方」の説明、実際例の提示

15：00 グループ研究

18：30 懇親会

20：30（グループごとに懇談またはグループ研究）

第 2 日 7 月 30 日（土） 終日グループ研究

第 3 日 7 月 31 日（日） 研究発表と閉講式

09：00 研究発表（4 グループ）

14：00 総評

14：30 グループ別、校種別研究協議

16：30 閉講式

ウ 講師 小原 光一 （財）音楽鑑賞教育振興会 常務理事  
渡邊 學而 （財）音楽鑑賞教育振興会 評議員、研究事業主管  
福井 昭史 長崎大学教授

エ 助言者 栗飯原喜男 埼玉県川越市立芳野小学校教諭  
大湊 勝弘 東京都世田谷区立松沢小学校教諭  
中島 寿 筑波大学附属小学校教諭  
長谷川要子 東京都墨田区立吾嬬第二中学校教諭  
松田真紀子 東京都足立区立第十中学校教諭

（勤務校は平成 17 年度現在）

オ 広 報 月刊『音楽鑑賞教育』誌 5、6 月号

「論文作文募集」の全国各学校宛てダイレクトメール（6 月初旬発送）

音鑑ホームページ

カ 参加費 30,000 円（交通費は、20,000 円を超えた分を財団が負担）



### 第3回「新・冬の勉強会」

音楽科教育の今日的課題を伝え、音鑑の研究内容の普及を図る集中講座として、財団の研究成果及び途中経過を公開し、参加者と共に学習指導要領に沿った音楽科教育、特に鑑賞領域の指導のあり方を考えることを中心に据えて実施した。

各参加者自身に関わる費用および印刷資料代を自己負担とし、財団は会場費及び講師・演奏謝礼を負担して実施した。

ア 主 題 これからの音楽科教育を考える

イ 会 場 国立オリンピック記念青少年総合センター（渋谷区代々木）

ウ 日 程 平成 17 年 12 月 26 日（月）～27 日（火）

第 1 日 12 月 26 日（月）

14:00～15:20 JAZZ レクチャーコンサート

講師 渋谷毅

演奏 渋谷毅オーケストラ

15:30～15:55 講演「学校でなければならない教育とは」

講師 東京国立近代美術館長 辻村哲夫

16:00～18:00 研究経過報告「音楽科教育の内容の連続性・発展性と  
指導計画の立て方」

報告 財団研究事業主管 川池 聡

神奈川県横須賀市立田浦中学校長 相澤宏一

日本女子大学講師 伊藤俊彦

助言 文部科学省 教科調査官 大熊信彦

第 2 日 12 月 27 日（火）

9:30～10:20 WEB&最新機器活用提案「視聴覚機器を活用したこれからの授業」

説明 財団事務局

10:30～12:00 講演「音楽を聴くことの大切さ」

講師 文部科学省 教科調査官 高須 一

13:00～15:45 公開指導研究「ねらいをしばった教材選択と指導法」

講師 音楽評論家 財団研究事業主管 渡邊學而

小学校低学年、小学校高学年、中学校別分科会

埼玉県川越市立芳野小学校教諭 栗飯原喜男

筑波大学附属小学校教諭 中島 寿

武蔵野音楽大学講師 山崎正彦

（勤務校は平成 17 年度現在）

エ 受講者 201 名 （小学校 108・中学校 71・他 22 名 / うち昨年参加者 97 名）

オ 広 報 月刊『音楽鑑賞教育』誌 10、11 月号、「論文作文募集」ダイレクトメール、  
音鑑ホームページ、各地音研大会研究収録協賛広告等

カ 参加費 5,000 円 資料代込み

## 助成研究発表会

平成17年度11月22日に、予定されていた研究発表会を行なった。

- ・平成15年度研究助成の部入選 東京都稲城市立城山小学校 二見美佐子教諭  
研究主題「地域に伝わる伝統音楽・伝統芸能を取り入れた小学校での授業の創造」

尚、平成16年度研究助成の部入選 東京都渋谷区小学校音楽鑑賞グループの研究主題「音楽を豊かに感じ、表現や鑑賞を生かした授業の創造」について川池研究事業主管が助言をし、2007年1月に研究発表会を実施できる見通しとなった。

## 2 - 3【普及事業】

### 講習会後援

全国各地で開催される音楽教育研究会、各都道府県および市町村主催の講習会、研修会全27件の講師の紹介、派遣の後援を行なった。

講習会後援依頼はさらに減少しており、今年度講習会依頼数は全31件、うち4件については条件が合致せず後援を行なえなかった。

予算比61.8%で終えたのは、講習会の後援依頼がさらに減少したうえ、大会に向けた指導助言依頼が皆無だったこと、講師謝礼などできる限りの負担を主催者に求めて実施したことによる。講習会後援数は1996年実績に対し24.1%、費用は9.6%に変化している。

### ア 平成17年度講習会開催件数内訳

各表( )内は16年度実績

	後援数	小学校	中学校	小・中	その他	参加人数
講習会	24(34)	16(16)	5(8)	3(11)	0(0)	1,130(1,709)
体験研修会	3(6)	0(0)	1(2)	2(2)	0(0)	70(169)
助言・講評	0(0)	0(0)	0(0)	0(1)	0(0)	0(0)
(機材貸出)	1(1)	0(1)	1(0)	0(1)	0(0)	
後援数計	27(41)	16(17)	6(10)	6(14)	0(0)	1,200(1,878)
参加人数計	1,200(1,878)	770	210	220	0	

### イ 平成17年度都道府県別開催件数 / 計17(22)都道府県

- 6件 神奈川(6)
- 2件 東京(5) 千葉(4) 和歌山(1) 広島(1) 熊本(2)
- 1件 北海道(2) 栃木(0) 新潟(1) 石川(1) 奈良(1) 大阪(1) 兵庫(2) 島根(1)  
山口(0) 香川(0) 福岡(1)

### ウ 平成17年度講習会講師 / 計11(18)名・依頼件数順、敬称略

- 6件 粟飯原喜男(9) 埼玉県川越市立芳野小学校教諭
- 6件 徳田 崇(2) 創価大学講師
- 5件 渡邊 學而(5) 音楽評論家、財団評議員
- 5件 中島 寿(2) 筑波大学教育学部附属小学校教諭
- 2件 川池 聡(3) 財団研究主管
- 2件 福井 昭史(2) 長崎大学教育学部教授

1件	大塚 弥生 (1)	東京都港区立赤坂中学校教諭
1件	大湊 勝弘 (0)	東京都世田谷区立松沢小学校教諭
1件	長谷川 要子 (1)	東京都墨田区立吾嬬第二中学校教諭
1件	江田 司 (1)	和歌山大学教育学部附属小学校教諭
1件	山崎 正彦 (1)	武蔵野音楽大学講師

### 普及活動

平成16年度から、音鑑が将来の展開のためにその考え方を伝えたい地域への普及活動を開始した。この一年間は普及対象の特定が難しく、希望のあった札幌市の音楽教育研究会への活動が主なものであった。

## 2 - 4【開発事業】

### 教材開発

平成18年度に新しい教材開発提案を行なうため、来期に向けた研究用機器として電子黒板を3台購入した。

また、パイオニアを通して販売を行っているDVD教材「学校の音楽鑑賞」(全7タイトル)は、昨年度に続き、各タイトル100枚の再生産を行った。

## 2 - 5【出版事業】

### 月刊誌『音楽鑑賞教育』の発行

#### ア 購読者の開拓

読者を惹きつける雑誌をもとめ、2年間続いた絵画的イラストに替え、コンピューターで加工した斬新な絵柄を取り入れた。アイキャッチとしては十分だったが、中身の古さが目立つとの読者の指摘も受けた。

また新たな購読層の開拓のため3ヶ月に1冊の割合で特集号を組み、固有の読者の座右に置かれる雑誌を企画した。

4月号「日本音楽の鑑賞指導」 7月号「民族音楽の鑑賞指導」 10月号「鑑賞指導と映像利用」 2月号「第38回論文・作文募集入選作品掲載」(本年度は、作文の特集号を2月号に合併した)

しかし、本来はこれから先生になりたい学生層、音楽専科ではない教員の要求に応えるものなどのターゲットを替えて行く主旨があまり浮き彫りにされていなかったと反省している。

#### イ 編集作業の改善

月刊誌の編集は雑誌としては古典的な手順で行われ、印刷場に籠り上がってくるページを校正して、その場で執筆者に文字数の削減などを訴える方式に頼っていた。これは執筆

者が音鑑にとって大切な人という認識で、入稿遅れがあっても事後処理のできるような体制を敷いていたためであり、それが故に、予めお願いすれば期日が早まる原稿でも、入稿を早めていただく措置などをしていないなどの悪循環に陥っていた現われである。

月刊誌自体を、文化芸術・研究書を伝える古風な体裁を良しとして、新しい読者の時代感覚に配慮しなかった体質も読み取れた。いずれにせよ月刊誌については全面的に仕事の流れを変えることとした。

### 書籍発行

助成研究による研究報告書が出版される予定であったが、報告者の体調不安があり、次期に延期された。

### ホームページ

年度始めにユーザーサイドからの視点重視、有益な情報提供を考慮したページ体裁へと全面的にリニューアルを行った。リニューアルに関わる費用は全て昨年度の経費で賄ったため、今年度予算からの支出はしていない。これにより、財団からの情報発信の場として過去の財団で事業活動の中から蓄積してきた情報を「授業に役立つ資料」として掲載することに年度を通して注力し、掲載内容の充実を図った。

アクセス数の飛躍的増加はまだまだ難しい環境と思えるが、お客様をホームページへ誘導する手段として、ブログによる紹介やサイト検索システムを導入した。ブログでは日々の気づきを掲載するとともに、タイムリーな情報提供の場となる記事を掲載した。

当初、予定していたネット販売システムの導入は検討した結果、現段階では非効率であるため見送ったため、今年度のインターネット費からは、ページ作成及び更新に関わる支出のみである。ネットワークにかかわる通信費用は従来通り、管理費の通信運搬費とした。

## 2 - 6【松本記念館】

今年度の音楽迎賓館は6月より土、日、祭日は原則開館日とし、水、木曜日を休館日にする事で、より利用し易い体制に変更した。記念館の名称を音楽迎賓館と変更し、迎賓館の名称に相応しい内部の整備を行った。また解り難い利用料金を改定し、1部は値上げした。

### 利用料収入

	千円		
	15年度	16年度	17年度
一般利用料	1,535	3,367	3,414
主催コンサート収入	242	1,778	1,466
合計	1,777	5,145	4,880

採算面で問題のあったクラシックコンサートを前年の9回に対して今年度は4回の開催に押さえた事による減収(750千円)と値上げによる団体利用減(テェロ、声楽レッスン)の減収が主要因で前年を下回った。

## 利用者数

	人		
	15年度	16年度	17年度
クラシックコンサ - ト	0	445	192
オペラ落語	123	150	192
ジャズライブ	0	44	218
主催コンサ - ト計	123	639	602
その他コンサ - ト	161	364	272
チェロ	277	170	62
声楽	120	201	74
書道	91	88	0
チェンバロ	0	0	30
句会	0	0	41
その他	79	101	109
団体レッスン	567	560	316
展示会	212	0	0
お茶会	88	365	203
親睦会	40	166	183
結婚式	0	67	0
研修会	45	46	81
庭園解放	0	0	50
その他	86	85	70
個人練習	238	317	394
見学他	210	165	146
合計	1,770	2,774	2,317

## 運営経費

	16期	17期	
		千円	
庭園管理費	2,793	2,265	
固定資産税	7,486	7,511	
機械警備料	499	499	
自動車費	714	301	
人件費	5,025	7,150	16期の人件費には常勤嘱託の人件費
その他	4,259	5,034	が含まれていない。事業人件費に計上
基本運営費小計	20,776	22,760	
整備諸経費	0	1,070	
施設補修費	4,377	2,161	
調律費	586	281	
出演料	1,331	779	
備品等購入費	715	266	
その他	722	475	
事業運営費小計	3,354	1,801	
合計	28,507	27,792	

しかし今年度の利用料収入では独立採算は程遠い。

来年度については、ブライダル業者との提携で増収（5000千円）は期待出来るが、平日の利用が殆ど個人の練習利用であり、ここでの団体利用促進が急務である。